蘇芳集

限りなく

青山　丈

窓遠く電車見てゐる生身魂
日当りの蟷螂と居て日に当る
ほどほどの人出となりぬ閻魔の日
行き過ぎた辺りより見る吾亦紅
羽田から来た人の言ふ帰燕かな
限りなくなりさうになる鰯雲
来る人を通す十月桜かな

たぶの木

前田　陶代子

たぶの木のごつごつ二百十日かな
コスモスの遠き日の揺れけふの揺れ
草川の草照る鳥の渡るころ
初鴨の鳴き合ふ日向濡れてをり
鴨来ると数ふることをまたしたる
やがて地にかへる諸草露けしや
おぼえ書く鉛筆にほふ十三夜

吾亦紅

峰岸　よし子

ひまはりの首をむんずと種を採る
葛の葉の吹きしづまりし葛の花
星飛ぶやピエロが人に戻るとき
玻璃ごしに悼み心を二十日月
白樺は月の木となり影細り
つれづれの風つれづれに吾亦紅
しだれゐる萩の重さを括りけり

うろこ雲

宮尾直美

少年の口笛秋の風を切る
風すこしでて露草の月夜かな
母の世の大皿小皿小鳥来る
川えびに塩一ふりや涼新た
初鴨に日のさざなみの立ちにけり
死をもつて知る消息やうろこ雲
山姥に逢ふやもしれず茸狩

十月へ

八木下末黒

誰を待つでなくコスモスの岸辺に
眸忌や畔に一束曼珠沙華
十六夜の月の中から母の顔
はらからを偲ぶ立待月にかな
曼珠沙華満開バイクを止めて道を聞く
蟋蟀や孔を穿つて革を縫ふ
十月へ川面ににじむ町明り

露草

吉田幸敏

畑隅に囲ふ露草師の忌来る
四たび忌の廻り四たびのうつし花
くるひなく露草摘む日とはなりぬ
摘み貯める露草永遠に師への花
富岳新雪師の墓所へ登り来て
天上も露草みてる師の忌かな
かがまれば墓石に我と露草と

虫が鳴く

小川美知子

凌霄の九月のいろを過ぎりけり
江の島へ行かうと思ふ秋の風
コスモスに時々触れて午後のバス
野の花の分けても吾亦紅の紅
秋風にはためくものに加はれり
新聞を拡げたままの良夜かな
更くる夜のかうしてゐても虫が鳴く

稿を重ねて

木内憲子

わづかなる稿を重ねて火恋し
反故になることなど秋の麒麟草
紅きざす穂草の風に触るるとき
ひめむかしよもぎなかなか手強さう
蛇穴に入るゆふがたの土くさし
約束のやうにひとりの月を待つ
鳴く虫のつかみどころのなき世なり

ぱつちりと

小島みつ如

好日や紅蜀葵の紅ぱつちりと
庭叩きゐるけふ長子婚約す
秋蝶のつがひ舞ひをる門を出る
車窓いま天神さまの初紅葉
靴下の片足さがす秋の蝉
吾子も老い点滴の日々虫の声
吾の身は元に戻れず満月よ

万華鏡

清水裕子

初紅葉鬼が栖みしと云ふ山に
穂芒や野面は風を聞くところ
蓮の実とぶ並べて社は朱色なる
社に秋津々うらうらの神祀り
裏窓の名残りの簾音を立て
調律の音の高低秋の蝶
万華鏡に心遊ばす長き夜

栗ご飯

下平直子

厨辺をぴかぴかにして厄日前
端濡れて二百十日の新聞紙
皮剝きは夫が上手で栗ご飯
青年の礼爽やかに擦れちがふ
文机を離れてよりの秋思なる
同齢の訃やしんしんと虫の声
待宵の空青あをと冷えてきし